

京都大学	博士（文学）	氏名	竹下 哲文
論文題目	詩の中の宇宙 ——マルクス・マーニーリウス『アストロノミカ』研究——		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、紀元1世紀初頭のラテン詩人マルクス・マーニーリウスによる全5巻からなる教訓叙事詩『アストロノミカ』について、作品が取り込んでいる文学伝統、思想潮流、歴史認識に留意しつつ、詩歌としての固有の価値とラテン文学史上に占める位置を明らかにしようと試みる。</p> <p>全体は「はじめに」で論文の構成と概要を示したあと、第1～7章、「結び」が続く、これに「付論」、作品の構成を示す表2つ、「参考文献」が付される。第1章「『アストロノミカ』の成立年代と研究史」が成立年代と研究史という二つの作品理解の基盤を概観したあと、第2章「『アストロノミカ』第1巻の序歌のストアの理論」において、序歌での「宇宙」に関わる重層的表現の検討を通じて、宇宙を詩の中に映し取るという詩人の詩作意図が導き出される。第3～7章はこの詩作意図に関わる背景と個別的な現われを検討し、じつに多彩な題材、要素が巧みに作品に組み入れられながら、宇宙を詩作に重ね合わせる表現に寄与していることを論じた。</p> <p>『アストロノミカ』の研究は近年にいたってようやく関心の高まりとともに少しずつ蓄積ができてきているものの、依然として欠落は大きく、これをまとめた一つの作品として統一的に捉える解釈は現れていない。第1章は、このことを研究史の概観を通じて確認したあと、この欠を埋めることを本論文の目標として掲げる。</p> <p>そのための統一的視点を得るため、第2章は第1巻の序歌に目を向け、宇宙の奥義に迫るといふ作品の主題をめぐる検討を行なった。その結果、そこにおいて強調される「新しさ」について、占星術という題材とともに、先行作品に用いられた表現の上に作品の文脈に即した独自の含意を加える詩作手法との両面があること、詩人の宇宙観はストア派のそれにもっとも近く、神の意志が宇宙の隅々に浸透したとする一種の汎神論であり、宇宙は神の制作した作品であるという点で、詩人が語る『アストロノミカ』という作品と相似関係にあること、マーニーリウスにとって詩は「真実の言葉」であり、宇宙をコスモスとすれば、その隠れた真理を開示するマイクロコスモスであること、以上が示された。</p> <p>では、そうした創造物としての宇宙と詩作品の類比という点で、どのような先行作品がどのような形でマーニーリウスに影響を与えたのか。第3章「ルクレーティウス『事物の本性について』におけるテクストの宇宙」はこの問いに答えようとする。ルクレーティウスにおいて書物としての宇宙という観念を見出そうとする既存の解釈</p>			

を、とりわけ生成のサイクルという点での詩と世界の類比という面から支持したうえで、そうした詩についての生への喩えとして「人生という書物」という想念がピロデーモスに見出されることを指摘した。

第4章「アンドロメダと戯れとしての物語」は、詩を宇宙についての「真実の言葉」とするマーネーリウスが神話という虚構の物語をどのように扱っているか検討した。詩人は明確に「物語批判」を述べる一方で、星座の起源に触れただりでは神話伝承をアレクサンドリア的博識の顕示に用い、さらに、最終第5巻ではアンドロメダの挿話を80行にわたって語る。このような一貫性の欠如と見える神話の扱いについて、それはむしろ発展的な変化であるという既存の解釈を支持しながら、アンドロメダ挿話に盛られる疑似語源的文彩に着目した検討を通じて、神話を星座の起源として疑いなく受け入れるのでも、真実ではない虚構として切り捨てるのでもなく、物語がそれ自体としてもつ芸術的価値を評価する態度を認めた。

では、そもそも詩人は主題である宇宙に対してどのような態度で臨んでいるのか。第5章「『農耕詩』から『アストロノミカ』へ——自然をめぐるマーネーリウスの矛盾」はこの問いに答えることを試みる。マーネーリウスには、一方で宇宙を神と等しいものとして、その真理の探究について敬虔な態度を示しながら、他方でこのプロセスについては攻撃的とも見える表現を用いるという矛盾が指摘されている。これに対し、ウェルギリウス『農耕詩』との比較から、神は万物を生み出すという点で自然(natura)と等しい存在であること、この自然に人間は神からの恩恵である技術(農耕あるいは占星術)をもって働きかけること、その労苦は「戦い」として表現されていることが『アストロノミカ』との共通点として認められ、上述の矛盾はこの文脈から理解されるべきであると論じられた。そのうえで、技術の発展としての文明史という観点からルクレーティウス『事物の本性について』第5巻後半の関係箇所を比較対象に加えて検討し、マーネーリウスの場合、時代を反映して進歩的・楽観的な文明史観が窺えること、そうした発展的な見方が段階を踏んで教えを進め、知的探求を深めていく教訓詩としての作品の組み立てに対応していることを示した。

教訓詩としての『アストロノミカ』が教授する技術である占星術には星の位置や動きを計測・計算する数学的内容が大きなウェイトを占めるが、その叙述に文学的要素を認めるアプローチが現われたのはようやくここ10年ほどのことである。第6章「計算としての理性——計り知れない宇宙を計ること」はその成果を踏まえながら、「理性=計算」(ratio)のモチーフに注目し、それが作品構想に関わる形で展開していることを論じた。すなわち、ratioが、指摘される数学的計算の含意にとどまらず、ストア哲学のロゴスや通俗的意義としての「金銭勘定、統計」という意義をも合わせ持つという観点から、作品に現れる「戸口調査」(census)の比喻を再検討し、そこには宇宙を「天の国家」として、その全資産を計り取る意味が込められていること、その

ような計量をなしうるratioは、第1歌で強調された宇宙の「計り知れなさ」を克服して、むしろ、それ自体が「計り知れない」力をもつことになる、という提示があることを論じた。

では、そのように宇宙全体を包括的に把握しようとする態度の背景にあるものは何か。第7章「『アストロノミカ』における百科全書主義」はこの問いに答えようとする。百科全書主義について、用語、ローマ独自の発展、帝政初期において「全世界」へ拡大した版図との相関、プリーニウス『博物誌』への発展の連続性を確認したのち、『アストロノミカ』が宇宙ないし自然全体を秩序ある一つの作品として捉える点において『博物誌』と共通すること、地上の諸技術について、それらが個別の知識として扱われるのではなく、占星術を介して天の原理による総体的な秩序立てを与えられていること、第4巻の「世界地図」と「占星地理学」の対応からローマの世界統治に関わる地誌理解が見て取れること、それによって作品がローマの「記念碑」的性格を示唆していること、分類・秩序立ての原理として黄道十二宮が全天を統率する機能を与えられるとともに、十二宮が示す環の構造はまた作品全体の構成と重なって叙述原理をなしていることを指摘した。

以上により、詩人が多様な伝統から多彩な要素を盛り込みながら、全体を一貫した構想のもとに作品を作り上げた、すなわち、雑多で無秩序に見える現実世界が実は神の配剤と自然の摂理に支配された調和的宇宙であるのと同じように、作品も統一的にまとめ上げられていることを論じた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文が研究対象とするマーニーリウス『アストロノミカ』全5巻は、帝政初期という執筆時期の点でも、占星術についての教訓叙事詩という文学ジャンルの点でも、もっと広く大きな関心を喚起してしかるべき作品であったが、現実には、そうした関心からの研究が行なわれ始めたのは近年のことである。そのことには、占星術に関する高度な専門性ゆえの難解さ、詩人の表現上の晦渋さ、取り込まれている思想的、文学的伝統に対する理解不足などが関わっており、かつては、文学作品として扱わない向きすらあった。本論文は、ようやく蓄積され始めた成果を踏まえたうえで、これまで研究進展の障害となってきた諸問題に取り組み、作品に統一的な解釈を施そうと試みた。以下、議論の本体をなす第1～7章について章ごとに成果の要点を記す。

まず、第1章「『アストロノミカ』の成立年代と研究史」と第2章「『アストロノミカ』第1巻の序歌のストアの理論」により、本論文全体の方向性が示される。第1章で得られた問題認識のもとに、第2章において序歌に提示される詩人の詩作意図が検討された。宇宙を詩の中に映し取るという企図のもと、序歌が強調する「新しさ」について、占星術という題材とともに、先行作品に用いられた表現の上に作品の文脈に即した独自の含意を加える詩作手法との両面があること、宇宙は神の制作した作品であるという点で、詩人が語る『アストロノミカ』という作品と相似関係にあること、詩人にとって詩は「真実の言葉」であり、コスモスたる宇宙の隠れた真理を開示するミクロコスモスであること、以上を作品を統一的に捉える視点として提起した。

第3章「ルクレーティウス『事物の本性について』におけるテクストの宇宙」では、『アストロノミカ』が描く創造物としての宇宙と詩作品との類比について、それがルクレーティウスに見られる書物としての宇宙という観念に由来するとする従来からの解釈を踏まえたうえで、そこにはまたピロデーモスに見出される、詩についての生への喩えとして「人生という書物」という想念も影響していることが指摘された。

第4章「アンドロメダと戯れとしての物語」は、神話の題材に関し、詩人がそれを虚構として「物語批判」を述べる一方で、アレクサンドリア文学的な博識の顕示に用いたり、アンドロメダ挿話をまとまった形で語りもするという、矛盾した扱いが見られることについて、当該挿話に盛られる疑似語源的文彩に着目した検討を通じて、神話を星座の起源として無批判に受け入れるのでも、真実ではない虚構として切り捨てるのでもなく、物語がそれ自体としてもつ芸術的価値を評価していると解釈した。

第5章「『農耕詩』から『アストロノミカ』へ——自然をめぐるマーニーリウスの矛盾」は、マーニーリウスには、宇宙の真理の探究に際して、宇宙を神とみなす敬虔な態度の一方で、探究のプロセスについては攻撃的とも見える表現を用いるという矛盾が指摘されているのに対し、ウェルギリウス『農耕詩』において、神の授けた自然に技術をもって働きかける労苦が「戦い」として表現されていることが参照されること、また、技術の発展としての文明史という観点からルクレーティウス『事物の本性について』の関係個所との比較を通じて、マーニーリウスに窺える時代を反映した進

歩的・楽観的な文明史観が段階を踏んで教えを進め、知的探求を深めていく教訓詩としての作品の組み立てに対応していることを示した。

第6章「計算としての理性——計り知れない宇宙を計ること」は、星の位置や動きを計測・計算する数学的内容に関する叙述に文学的要素を認める最近の成果を踏まえたうえで、「理性＝計算」(ratio)のモチーフに注目し、それが指摘されるような数学的計算の含意にとどまらず、そこには——「戸口調査」(census)の比喩の再検討を通じて——「天の国家」たる宇宙の全資産を計り取る意味があること、そうした計量をなしうるratioは、第1歌で強調された宇宙の「計り知れなさ」を克服し、むしろ、それ自体が「計り知れない」力をもつことになる、という提示を読み取った。

第7章「『アストロノミカ』における百科全書主義」は宇宙全体を包括的に把握しようとする態度の背景として百科全書主義が考えられることを論じた。その用語、ローマ独自の発展、帝政初期において「全世界」へ拡大した版図との相関、プリーニウス『博物誌』への発展の連続性を確認したうえで、『アストロノミカ』が地上の諸技術について個別の知識として扱うのではなく、天の原理により総体的な秩序立てを与えていること、第4巻の「世界地図」と「占星地理学」の対応から見て取れるローマの世界統治に関わる地誌理解を通じて、作品がローマの「記念碑」的性格を示唆していること、黄道十二宮が全天を統率する機能とともに、その環の構造により作品全体の構成原理をなしていることを指摘した。

以上の成果は丹念なテキスト読解、徹底した資料参照、先行研究への周到な目配りに支えられており、この難解な作品に統一的な理解と文学史上の位置づけを提起したことは高く評価される。とはいえ、「統一性」を主張しようとするあまり、ときに議論に強引と思えるところも見られた。また、宇宙の「神秘」に迫る「真実の言葉」とアレクサンドリア文学の諧謔的視点は整合的に詩的表現を与えられているのかどうか、課題は残されているように思われる。論者のさらなる研鑽に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2020年1月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。